

依他起性における雑染と清淨の問題

安井 廣 濟

唯識派の三性説は、依他起性を依他起性として眞實に知らずに誤つて認識している遍計雑染の姿と、依他起性を依他起性として眞實に自覺して認識した圓成清淨の姿との、二つの姿を一つの依他起性において語ろうとするところに成り立つてゐる體系と考えられる。

唯識派にとつて依他起性は、遍計雑染の姿をもつて認識されるところのものであるとともに、圓成清淨の姿をもつて認識されるところのもの、すなわち、雑染と清淨との認識の所依 *āśraya* であり、雑染より清淨へという認識の否定的轉換が行われる基體 *adhiśraya* である。したがつて、唯識派の依他起性は、雑染として認識されつつ清淨として認識されることの可能なもの、いいかえれば、たんに雑染として認識されるものでもなければ、たんに清淨として認識されるものでもなく、雑染と清淨との認識を超越した存在、すなわち雑染あるいは清淨として一義的にいいえない不可言性 *anābhilāpyatā* のものと考えられる。中邊分別論の第二十一偈に『もし彼れが雑染でなかつたならば、すべての人は解脱しておろ。もし彼れが清淨でなかつたならば、努力が無益であらう』と云われるのは、よくこれを物語つてゐる。

ところが、中觀派の清辨の般若燈論第二十五章を見ると、清辨はかような唯識派の依他起性の考え方に對し、『雑染と清淨とを超越

した一個の他依起性が、いかにして雑染と清淨という二つの矛盾した性格のものに變化しうるか』という意味の反駁を加えている。雑染と清淨との認識の所依であるかぎり、雑染と清淨との認識を超越した存在でなければならぬが、しかしまた、雑染と清淨との認識の所依であるかぎり、何らかの意味で、雑染としてあるいは清淨として認識されるものに變化しなければならぬのであつて、清辨は依他起性におけるこの變化を不合理な矛盾であるとするのである。したがつて、この清辨の反駁は、ただに依他性における雑染と清淨との問題を吟味するというにとどまらず、三性説の成立そのものを批判する、きわめて本質的な反駁であるといつてよい。

けれども唯識派は、右の反駁に對し『水界と金と虚空とが清淨である如く、清淨であると認めらる』と答えている。この譬喩は中邊分別論の第十六偈 *c d* である。したがつてこの譬喩の意味は、中邊分別論に明示されているが、ここに取り扱う般若燈論に對するアパローキタプラタの註釋、その他、清辨の中觀心論入瑜伽行眞實決擇章の第八七・八八偈（山口博士、無と有との對論、五五七頁）にも、その意味が述べられてゐる。そこでそれらを參考にしてこの譬喩の意味をうかがうと、この譬喩の意味は『濁つた水が薬と合するときに清らかになり、鏽のついた金が打つことによつて清らかにな

り、虚空が烟と離れることによつて清らかになる。その場合、水や金や虚空は、それ自體の存在を雜染より清淨へ變化せしめたわけではない。それ自體の存在は變化せず、ただ濁や錆や烟などの外來的な垢によつて雜染されたそれ自體を、それらの垢の排除によつて、もと通りにあらわしたすぎない」という意味であると考えられる。

したがつて、この譬喩によるかぎり、依他起性が雜染より清淨へ變化するということは、依他起性それ自體の存在が雜染より清淨へ變化するということではなく、依他起性が外來の客塵煩惱である雜染の認識と離れて、清淨なる悟りの認識にもと通りにあらわれるということである。すなわち、依他起性それ自らの存在は、雜染の認識と清淨の認識とを超越した變化のない *avivarta* な自體であり、依他起性が雜染より清淨へ變化するということは、依他起性へ向う認識の性質の變化に外ならない。いわばそれは、依他起性がレンズの變化によつて眺め變更られるが如きことを意味している。したがつて、かような認識の變化という立場からいえば、雜染と清淨とを超越した一個の依他起性が雜染と清淨という矛盾した二つの性質に變化しても、それは清辨のいうように不合理な矛盾というべきものではない。唯識派はかような意味で清辨の反駁に答えているのである。

ところが、清辨は、さらにこの唯識派の回答に反駁をつづけている。これによると、右の如き唯識派の立場は、『アトマンが有つて、しかも雜染と清淨とがあるとする我論の過失におちいるものであり、正しい道理がない』とされている。そして註釋者のアパローキタブラタは、『正しい道理がない』という理由を説明して『不可言說のものが言說されている。しかし、雜染と言われるのであれ

依他起性における雜染と清淨の問題（安井）

ば、どうして清淨であろうか。清淨と言われるのであれば、どうして雜染であろうか』と述べている。このアパローキタブラタの言葉を敷衍していえば、『唯識派は、不變化であり不可言である依他起性が、雜染より清淨へ變化することを雜染より清淨への認識の變化として矛盾なからしめようとする。しかしそれは、依他起性を雜染と清淨の認識の外に超越的に區別してのことにすぎない。實をいえば依他起性は、雜染と清淨との認識の外に超越的に區別されるべきものではない。依他起性が雜染より清淨へ變化するということは、雜染と清淨の認識が矛盾であるが如くに、同様に矛盾であるといわねばならぬ。すなわち、依他起性は雜染として認識されるとすれば清淨でなく、清淨として認識されるとすれば雜染でなく、雜染と清淨は依他起性において二者擇一的に矛盾する』という意味であろうと思われる。アパローキタブラタの言葉によるかぎり、清辨が唯識派を批難する立場は、このように依他起性を雜染と清淨の認識より區別せず、雜染と清淨の認識をただちに依他起性それ自らにおくる矛盾とする立場であると考えられる。

さて、清辨の立場が右のようであるとすれば、彼れが依他起性の雜染と清淨とを語ろうとする場合には、彼れは何らかの意味で雜染と清淨との認識を依他起性において矛盾のままに認めることになるであらう。次の清辨の言葉は、かような彼れの立場を示している。それは、彼れが唯識派に對し『汝の法界（依他起性）は煩惱の顛倒世俗知とも、不顛倒世俗知とも俱生しないから雜染と清淨にならないが、我々の法界（依他起性）は、顛倒世俗知と俱生するから雜染となり、不顛倒世俗知と俱生するから清淨になる』という言葉である。この言葉に明かなように、清辨にとつて、依他起性は顛倒した

雑染の認識とともに、あるいは不顛倒な清淨の認識とともに、それぞれを俱にするものであり、それらの認識と俱生せず超越するものではない。依他起性の雑染と清淨は、依他起性それ自體の上に矛盾のままに認められている。彼れにとつて雑染と清淨は、依他起性自體の全存在をかけた全く矛盾した出来事に外ならない。

けれども無論、清辨はかような矛盾を一個の『有』なる依他起性において語ろうとするのではない。依他起性が一個の有であるかぎり、雑染と清淨は依他起性において二者擇一的に矛盾せざるをえない。これは先に述べたアパローキタブラタの言葉から明かである。

したがつて清辨にとつて、依他起性は一個の有として存立することの許されない『無』であり、かような無において雑染と清淨が行われるのであると考えられている、といわねばならない。清辨は唯識派に對する批判の最後に『雑染と清淨は世俗としての假説 *upadaya* である』といっているが、これは雑染と清淨が勝義として無であること、いいかえれば勝義として『無』において行われるということであろう。要するに清辨の立場は、雑染より清淨へ轉ずる依他起性が無にして轉ずるところの全く無媒介な轉依を語ろうとする立場であり、雑染に死することがただちに無言のうちに清淨なる悟りであるような、行證的直觀的立場であると思われる。すなわち、彼れの立場は、依他起性という所依に對して見方の轉換を行おうとする、唯識派のような知的な轉依の立場とは全く異つてゐる。彼れにとつて、雑染より清淨へということとは、依他起性それ自らの客觀的に對象化して考えられない、身を賭しての具體的な行為に外ならない。したがつて、かような立場から唯識派の立場を眺めると、唯識派は、雑染と清淨を依他起性の上に演ぜられる單なる二個の認識にす

ぎないものとする、實踐性を缺いた抽象的な立場であり、先に述べたように『汝の法界（依他起性）は煩惱の顛倒世俗知とも、不顛倒世俗知とも俱生しないから、雑染と清淨にならない』とも批難すべきものであつたのであらうと思われる。

尤も、唯識派の三性説は、龍樹の中觀説が緣生法の眞實を否定的に理解する空無の見におちいろうとしたのに對し、依他起性（緣生法）の眞實を肯定的な圓成實性の姿において理解しようとするところにあらわれた學説と考えられる。したがつてこの學説のかような思想的意義から考えると、三性説は空の教學をつつみつ、これを超えようとする意義をもつものというべきであり、清辨の批判に見られるような、空の教學の特色をなす具體的な實踐的性格を全く缺如した抽象的な教學であるとは考えられない。そこでそういう立場から見ると、清辨は學派的な對立意識からあまりにも唯識派の立場を抽象的にとらえずにすぎているのではなからうかとも思われる。事實また、そういういかうかも知れない。しかしまた考えてみると、依他起性の眞實を肯定しようとするところに唯識派の思想的立場があるかぎり、そこに必然的に依他起性が立てられるわけであり、そのかぎり依他起性は基體的な不變化の自體となり、雑染と清淨はその依他起性の上の認識の性質となるのであつて、そこにどうしても清辨の以上のような批判が行われねばならなくなると思われる。要するに、依他起性の眞實を否定的に理解するか、あるいは肯定的に理解するかによつて、依他起性における雑染と清淨の問題の理解が異つてくるのであつて、ここにこの問題を解明する方法論的な立場が見いだされるように思われる。